碩心

社団法人　日本詩吟学院岳風会　認可

神奈川　碩心会　発行

元年12月号（209号）
発行者
根岸岳萃
編集者
中村愛岳

元年12月現在会員数

逗子地区	165名
葉山地区	259名
大船地区	44名
（合計）	（468名）

雑感

銀詠支部　嵐田光山

文化祭の詩吟詩舞発表会に、今年も合吟「偶成」で出吟しました。六名（男性2・女性4）の小グループでしたが、他流派の方々も聴いていられる事でもあり、一同精一杯の熱吟で頑張りました。事後、千葉先生の講評によれば「出だしの音声も揃い、且つ五本調子であったので、それなりの迫力も出ていた」との評価を戴きました。男女混声の合吟で一番苦労するのが音声の揃いだと思いますが、それをクリヤーした事で満足した次第です。

私が吟道を志したのは、六年前の六十五才の時でした。その頃は札幌に住んでおりまして、現札幌支部長本間岳恵先生（北海道紙工業材料株式会社々長）とは以前から仕事の面で昵懇の間柄で、私が仕事を離れ、年金生活に入る際、氏のお勧めを戴いたのがキッカケとなりました。老境に入っての入門では岳号到達はおぼつかぬ話ですが、二年程前、もとの住居のある逗子へ帰る折、本間先生より、当会々長根岸先生を御紹介下さったお蔭で、流派を替える事なく、吟道を学べるのは、大変倖せだと思っております。

発表会当日、三井先生の御挨拶の中で、御自身の経験では、七十五才頃が発声の峠であったと述べていられました。亦県本部の高令者表彰では、今年八十才を超えた方五十数名とのことで、私も体調次第ではあと十年は大丈夫かな等と、自分に言い聞かせている今日この頃であります。

終りに、札幌で四年余、当地へ来て二年余の詩吟修業を通じて気付きました事を一つ述べたいと思います。岳風会の流統を守るとの指導要領は、彼の地でも同じですが、お稽古終了時札幌では必ず「吟道精神」を全員整列し、指導者の一句ずつ先導で斉誦しております。これは大きな会場で行なわれる吟道大会に於いても実施されておりました。こちらへ来て一度もその様な場面に出逢っておらず、いささか物足りぬ思いを致しておりますが、地域が違えば習慣も異なるのは当然です。然し物事「礼に始まり礼に終る」の観点からすれば、朗吟は邪穢を蕩滌し・から始まり、一吟天地の心・で結ぶ、あの「吟道精神」の斉誦が、あと味の良い終礼となる事だけは確かです。碩心会でも検討されては如何かと思いまして敢えて記した次第です。（失言多謝）今後共諸先生方の御鞭撻をお願い致します。

（県本部総務理事に）

11月21日付を以て、加藤岳相先生が、増田岳厚・中島岳湖先生と共になられました。

（碩心会初吟会）

と　き・平成2年1月14日(日)10時より

ところ・逗子京急ビーチセンター

（県本部初吟・初理事会）

と　き・平成2年1月28日(日)10時30分より

ところ・大和・北京飯店

（第97回・全国吟道大会）

と　き・平成2年3月18日(日)

ところ・明治神宮会館大ホール

右会出吟については人数制限があり、次回から常任理事以上は一年おき、其の他の方は上位から順番に参加ということになり、左記18名が、県本部合吟男性二題、女性二題の合吟に参加出吟していただくことになりました。（碩心会）

加藤岳相　三井岳瓏　沼田岳雷　井沢潮岳
小峰桜岳　森田嶺岳　斉田俊岳　南部越岳
沼田義岳　（以上男性18名）
千葉香岳　中村愛岳　森田暁岳　岩崎恵岳
鈴木孝岳　林　真岳　山口夕岳　佐藤湧岳
大石春岳　（以上女性18名）

長寿保持の健康管理のために

山の根支部　佐藤雅風

皆伝許証を拝受することを唯一の念願として居ります私は、現在81才の老令で、目的達成には七年の年月を要し、長寿保持には健康管理が必須条件で、最も重要視されるのは老人性痴呆の防止と思考し、是の対策には詩文暗誦と、内容考究による頭脳の活用が適切と判断、現有参考書の他に、新たに漢詩解説に関する書籍を購入、浅学をかえりみず、第一回の試みとし次掲の通り調べ、三井先生の御監修を賜りましたので御覧に供します。漢詩御勉学の御参考になりますれば誠に幸甚に存じます。

元二の安西に使するを送る　王維

（時　代）

中国唐王朝第六代玄宗皇帝時世
即位712年（在位44年）退位756年
日本の奈良時代初期

（送る人・王維）

出生699年　死去761年

（送られる人・元二）

姓が〝元〟という人で〝二〟は一族の兄弟や従兄弟など親族関係の子で、生まれた順に呼んだ中国慣習の順位とある。

（送った場所・渭城）

唐王朝国都長安（西安）郊外

（行先の場所・安西）

唐王朝時代〝都護府〟設置地（新疆ウイグル自治区所在）

王維は宮廷詩人として、玄宗皇帝の御信任が厚く、官職は尚書右丞（唐王朝官制三省の一である尚書省長官の補佐官）と記されてある高級官吏で、公用で遠隔の地安西の都護府（唐王朝が塞外諸異民族統御の目的で設置した地方官署）へ出張する別れを惜しんで吟じた詩ではなかろうかと思料されます。

大正十五年十二月二十五日

大正は葉山で終る

大正天皇は葉山御用邸をこよなく愛され、その行幸と滞在日数は、他の御用邸より圧倒的に多いといわれています。最後の行幸は、大正十五年八月十日からで、同年十二月二十五日附属邸（現・しおさい公園）で崩御されました。

その頃本邸は、関東大地震で損傷をうけ

再建新築が進められていて、完成が十二月予定であったため、附属邸で療養の日々を送られたのでした。すでに病の篤かった天皇を本邸にお遷しすることが出来なかったことを非常に残念がられた新天皇（昭和天皇）は、せめて一度は新邸をご覧にいれたいという御配慮から、翌日本邸の天皇御座所に御遺体を安置されました。

そして二十七日、御遺体は東京へ還御されることになり、御柩は御車寄から御霊柩馬車に移され、玉砂利の上を正面に向った。

時まさに午後四時四十五分。折柄一色沖合に在泊中の軍艦山城から、いんいん天にとどろく四十八発の弔砲がうち出され、駆逐艦四隻の乗組員すべてが艦側に整列して奉送。先駆は近衛騎兵隊、西侍従武官及び侍従の自動車がこれに続く。

正門前の警察署から附属邸にかけ、横須賀海兵団の海軍儀仗兵の「捧銃」に送られるように御霊柩馬車は御用邸をあとにした。

この日、御用邸から逗子駅（海岸通り）にかけて、約六粁の沿道には在郷軍人、婦人会、小学生、一般奉送者など二万人を越す人々が並び、各艦、各隊、各校の海軍儀仗兵二千余名が整列、最後のお別れをした。逗子駅着午後五時三十分、皇居着八時五分。

（ふるさと歳時記より）

第23回葉山町文化祭

詩吟・詩舞の会盛会に終る

昨年の文化祭の詩吟詩舞の会は、諸般の事情により取りやめとなり、今年は新装成った福祉文化会館大ホールでの、はじめての文化祭故、誰もが期待を胸に、三々五々会場に集まりました。

天気は上々。広い舞台、金屏風の前で、吟じ、舞うことの何と気分のよいこと。番組もスムーズに進み、後半ますます盛り上りました。

役員の皆さんもそれぞれ責任をもって動いて下さり、無事に、盛会に終ることができました。又来年の文化祭にはもっと内容をもりあげましょうなどと話しながらルンルン気分で帰路につきました。

文化祭後日譚

文化祭の翌日、秋元先生から電話が入った。それは、文化祭が終って家に帰った後、全然詩吟をやっていない男性三人から〝千島よ還れ〟の吟詠に感動したという電話が次々に入ったという。又やはり詩吟をやっていない女性からも〝歩いてゆけなければ〟に大変感動したという電話も入ったという。だから今嬉しくて一杯やっているんだよということでした。

さきの二つの詩は、詩文が解りよかったこと。又〝千島よ還れ〟の詩は、領土を失った日本人の気持ちが切々と心につたわってくる。それ故詩吟をやっていない方達に純粋な気持ちで、感動してもらえたという事は大変嬉しい。作者の三浦リエという方は無名の方で48年になくなられたという。

星霜二十有余年
吾れ故郷に戻れず
人生幾許も無し
生有る限り往かんと欲す
ノサップ岬に佇み国後島
異国のものと眺むるも悲し
あゝ日本の島国後を思う
あゝ日本の島千島よ還れ

第39回逗子文化祭

詩吟・詩舞発表会終る

十一月五日逗子図書館ホールに於て盛会に終りました。

会場は満席、熱気いっぱいでした。逗子の場合は流派の違う人達が競いながら和気藹々で、書道吟あり、華道吟あり、詩舞ありで、目と耳を楽しませてくれ、あきることのない楽しい雰囲気でした。

練吟メモ

易水の送別

○此の地燕の丹に別る　壮士髪冠を衝く
　昔時人已に没し　今日水猶寒し

この詩は、中国の人にはよく理解されるが文の省略が効いているので、吟詠界ではかなり誤った向きの解釈がある。このメモは漢詩の解釈には踏みこまないでいるが、この詩に限って少々注釈を加え、ご理解を得て、今後大会等で沢山吟詠していただきたいものと念願しているところである。

○〔語釈〕　易水（今の北京の西境を流れる川）、燕（中国の戦国時代ー前四〇〇～前二二〇ーの国名）、丹（燕の国の太子）壮士（ますらお、ここでは荊軻ー人名ケイカ以下同音の略字刑可と表記ーをいう）、髪冠を衝く（激しい怒り方をいう）。

○〔通釈〕は教本にあるが、要約すると、易水のほとりのこの地は、かつて刑可が燕の太子丹と別れたところである。その時、壮士刑可の髪は、怒りで逆立ち、冠をつきあげんばかりであったという。そのような話ももう昔のこととなり、その時の壮士はもういなくなっている。そして今は、易水の水だけが昔のままに寒々と流れているばかりである。

○〔参考〕㈠この詩は、作者駱賓王がある寒い日、ある人物（詳細は略す）と易水の故事と同じ場所で別れたが、その時九〇〇年前に丹（見送りの人も）と刑可の故事の別れの場面をはっきりと思い出し、同じような情況だなあと深く感銘してこの詩ができ上ったものである。従って、これは叙景の詩ではなく、むしろ詠史（歴史を詠ずる）である。㈡歴史上の話は、燕の国の太子丹が、人質として秦（しん）の国に行ったところ、秦王の処遇がひどかったのでこれを恨み、秦王（後の始皇帝）の暗殺を刑可に依頼した。出発に際し、刑可は「風蕭々として易水寒し。壮士一たび去って復還らず」と歌った。白装束をした（中国の当時の風習）刑可も見送りの人びとも皆目をいからし、髪の毛は逆立って冠をつくほどだった。㈢この詩の原本の題名は「易水において人を送る」である。昔の話と同じ場所で、誰か（この詩では名前を出していない）を送った。情況があまりにも故事にそっくりであったので感慨措く能わず、すなわち「易水の送別」の詩一篇ができ上った。そしてそれから一三〇〇年経った現在、この詩に接するとたちまち白装束をした人びとの悲壮な姿が、まぼろしのように浮び、名状しがたい厳粛な気分にさせられる絶唱である。

第16回

全国選抜者吟道大会の課題吟

左記の九題・教本通りに吟ずること

1 太平洋　（安達漢城）（二巻　23頁）
2 母を憶う　（頼　山陽）（〃　26頁）
3 江南の春　（杜　牧）（〃　78頁）
4 家書を得たり（高　啓）（〃　90頁）
5 白雲山に登る（太宰春臺）（三巻　7頁）
6 別詩　（范　雲）（〃　66頁）
7 子等を思ふ　（山上憶良）（朗詠集16頁）
　歌の反歌
8 山ざくら　（本居宣長）（〃　50頁）
9 心の鐘　（若山牧水）（〃　82頁）

（入　会）

550 鈴木俊子　逗子市池子二ー二〇ー一二三
　（若　葉）㊟〇四六八ー七一ー〇四八六

（退　会）

194 菊地高風（唐木山）

昭和天皇一月七日崩御。時代は昭和から平成へ。そして今、めまぐるしい一年が終ろうとしている。

詩吟人口も減少気味の一年だったが、来年はお互いに力合わせて、大きな輪をひろげてゆこうではありませんか。